

コレクション紹介 「竹村文庫」について

文学部教授 鈴木 立子



本学にある「竹村文庫」は旧制浦和高等学校教授竹村昌次氏の旧蔵書であり、1664年から1938年に刊行された欧文図書からなっている。概要は、ヨーロッパ、アジアの文化、歴史、宗教に関する概説書、研究書、アジア諸語の欧文訳、及び各地に派遣された使節、宣教師、探検家の報告書である。若干の書籍には購買年月日が記され(早いものは明治36年とある)、日付とともに「Parisニテ求之」と書かれているものもある。

竹村氏の蔵書が愛知大学に寄贈されたのは1953年5月28日であることは『愛知大学五十年史』に記されている。愛知大学非常勤講師武井義和氏に当時の記録を探していただいたが、今のところその経緯を示す文書は見つけられていない。竹村氏は1942年4月(『朝日新聞』4月6日朝刊 下記成田氏情報提供)に67歳でなくなっており、本人の意思による寄贈ではあるまい。寄贈のいきさつを探している中で明らかになった竹村昌次氏について先ず述べてみよう。

竹村昌次氏とは

『旧制浦和高等学校同窓会 会員録 昭和15年版』・『旧制浦和高等学校生徒名簿』によると在職期間は1922年から1939年であり、1936年まで文科の教授、1937年から39年までは講師とある。担当教科は歴史であり、1925年・26年には在外研究に出ており、1933年には東京高等学校の教授を兼任している(以上は、埼玉大学研究協力部図書情報課、情報サービスチーム、成田義樹氏に調査していただいた)。旧制浦和高等学校は1922年4月に最初の入学者を迎えており、発足当時から浦和高校で教鞭を執っていたことになる。1936年11月に当時の校長が職務中に死亡したが、その際「竹村昌次教授を校長事務取り扱いとした」(『読売新聞』11月21日朝刊)とあり、37年以降講師とあるのはそれと関係があるのではないかと推測される。また浦和高校に任命される前の情報は混乱しているところもあるが、維新史料編纂官であったと思われる。在外研究がフランス、ドイツ、イギリス、アメリカで行われたことは、『支那時報』巻5, 3号(大正15年9月)の竹村昌次「獨徇の東洋文化研究熱」と題した一文からわかる(但し、竹村の著はない。武井氏情報提供)。

一方、東京大学文学部西洋史学科卒業生名簿に1902年(明治35年)7月卒業とある竹村昌次なる人物がおり、1901年に史学会の会員となっている。日本に近代歴史学をもたらしたリースの最後の学生の一人であったようだ。

財団法人東洋文庫に所蔵されている那珂通世(1898-1904年、東京帝国大学講師)が1901年(明治34年)に東京大学で行った『支那近世史』の講義ノートの筆者の竹村昌次は彼であろう。これは中山久四郎(1899年東洋史学科卒業)により東洋文庫に寄贈されている。すでに卒業していた中山が旧知の竹村から講義録を譲り受けたものであろうか。この講義はチンギス・カンの出現からモンゴル国の形成にかかわるものである。那珂は『支那通史』(明治21-23年刊行)を書いた際に明代に編纂された『元史』の不備に気づき、モンゴル史研究をはじめ、最初の成果を『東洋小史』(明治36年1月出版)としてあらわした。活字にする前の最新の研究成果を示した講義であったことがノートから窺われる。その後、那珂のモンゴル史研究は不朽の名著となった『成吉思汗實録』として結実した。この人物と「竹村文庫」の竹村昌次氏とを同一人物と考えたいが確証があるわけではない。ノートと蔵書にある氏の覚書などから筆跡鑑定は可能であろう。

竹村氏についての二系統の情報は現在のところ以上につきる。いずれにしても愛知大学に蔵書が寄贈された理由を示唆するものはない。『支那時報』に記事があることから、武井氏は東亜同文書院関係者との縁を考えられる。しかし竹村氏の生徒には歴史研究者も何人かおり、書物の性格から彼らが仲介の労を執った可能性もあると私は思っている。

「竹村文庫」の特徴

限られた時期に蒐集された個人蔵書はその個人の研究動向・関心を示すことは謂うまでもないが、時代の要請などが垣間見えるおもしろさがある。本文庫でも、西欧諸国と植民地との関係を主題としたもの、ロシアの政治・歴史に関わる書が目につき、植民地政策が重要な時代であったこと、西欧にとっても日本にとってもロシアが大きな存在になってきた時代に蒐集されたことを反映している。

しかし本文庫の特徴として先ず挙げられるべき事は、西欧諸国家や布教教団が世界各地に派遣した使節の報告書や個人旅行の記録などが多いことである。その中には法顯(5世紀)の『佛國記』など非欧米人による著書の翻訳も含まれている。とりわけ各国の旅行記、報告書やその要約(翻訳も含む)を収録したフ

ランスで出版された叢書が5部あることは注目に値しよう。これだけ一箇所に揃っているのは国内では他にないのではないか。それらは古いものは1749年(64vols.)に、ほかは1780(23vols.)、1790(5vols.)、1833(46vols.)、1841(12vols.)年に刊行され、見る如く非常に大部なものもある。

遑れば「大航海時代」が始まるや、各国の新航路開発や植民地争奪戦の中で現地の事情や航路に関する情報収集は不可欠になった。16世紀にはすでにヴェネツィアのラムージオ、イギリスのハクルートなどが古い旅行記や公的・私的な探検の報告書を編纂した。またフランスでは18世紀に中国など各地に派遣された宣教師の手紙が逐次公開させてられている(本文庫にもそれらから編纂したものがある)。しかし他者を知ることに情熱を燃やしたのは、必ずしも政治的・実用的な要請だけではなかった。侵略・進出・布教は他者の文明・文化を知り、文明を比較研究する契機ともなった。フランスでは17世紀に学識ある宣教師を中国に派遣し、中国に関する知識を積極的に集めている。現地に足を踏み入れた者の報告のみがアジアを初めとした諸地域を知る手がかりの時代であった。叢書の出版の目的に、「歴史・統治(政治)・宗教に関かわることを知る」とうたっているものもあるが、それを示していよう。また本文庫にある19世紀に出た個々の報告書についても、早いものでは使節や旅行が終わって1年足らずで書籍として刊行されている。

書籍の存在からそれを必要としてきた時代背景を述べたが、これらの書物は「他者」とされた側にとっても大きな意味がある。他者であるヨーロッパ人から見たアジアやアフリカ、あるいは同じヨーロッパの中でも他国についての観察は、見慣れた者には気がつかない点、あるいはことさら記録する必要を認めなかったものに光を当てた。それ故に古くから歴史学の第一資料として使われてきたのである。しかしまだその利用は充分ではない。本文庫のようにある程度まとまって収録されている利点は、これらの記録を一括して検討することができることである。その結果、歴史を知るための新しい観点への道を開いてくれもする。この点から本文庫の書籍をあらためて紐解いてみたいものである。